左からグレゴール・A・マイアホーファー、ヴィヴィ・ヴァシレヴァ
Photo: Magdalena Zieba-Schwind

ドイツ

複雑で美しい音楽 ── “ごみ” で演奏

各地で公演『リサイクリング・コンチェルト』

ジャムの空き瓶やペットボトルなど、役目を終えた身近な素材を再利用して、複雑で美しい音楽を奏でるプロジェクトがドイツで進んでいる。作曲家グレゴール・A・マイアホーファーによる協奏曲『リサイクリング・コンチェルト』は〝ごみ〟を楽器に変えることで、身近な環境を捉え直すきっかけを提示する。

〝ごみ〟が楽器にアップサイクル 一つひとつ入念に調律

ビニール袋のカサカサした音は、静まり返った劇場内では忌み嫌われるノイズだ。だがその音が、観客席ではなく舞台上から聴こえるコンサートが存在する。

作曲家グレゴール・A・マイアホーファーが手がける協奏曲『リサイクリング・コンチェルト』では、不要となった〝ごみ〟が発する音が重要な役割を果たしている。打楽器奏者ヴィヴィ・ヴァシレヴァとのコラボレーションによる本プロジェクトは、今年2月にドイツでの初演を経て、6月には現地のオーケストラ楽団を交えて英国でも上演された。

作曲家が編曲をする際、意外なものが楽器として用いられるケースは少なくない。グスタフ・マーラーが『交響曲第6番』でカウベル（牛の首にかける鈴）を打楽器に加えたのは有名な話だ。マルコム・アーノルドは掃除機3台と電動床磨き機1台を取り入れて『大大序曲』をコミカルに仕上げた。

一方で『リサイクリング・コンチェルト』においては、ガラスやプラスチック、金属などの廃棄素材が楽器へとアップサイクル（創造的再利用）されている。ガラス瓶は小さなフタやペーパークリップを詰めてリズムを刻むシェイカーに、コーヒーメーカー用の使用済みカプセルを集めてぶら下げれば、カラカラと鳴るベルのように生まれ変わる。

木琴をはじめとした従来の打楽器と、独自に発明した楽器の間を行き来して交互に演奏するヴァシレヴァ。吊り下げられた陶器の植木鉢は一つひとつ入念に調律されている。

空のペットボトル製マリンバに鍋やフライパンなどの台所用品で作った楽器が並ぶ光景は子ども向け番組のようだが、奏でられる音色は驚くほど複雑だ。2本のペットボトルを叩き、強く引き、指ではじく彼女の巧みなカデンツァ（即興演奏）に、観客ばかりかオーケストラの共演者たちまでもが身を乗り出して聴き入っている。

今後も各地で開催が予定されている『リサイクリング・コンチェルト』は、公演先によって都度その調べを変えるだろう。現地で調達した素材で新しい楽器を制作し、地域の廃棄環境を考えることも欠かせないプロセスなのだ。

楽器の希少な材料、枯渇の危機 聴覚と視覚で環境問題を捉え直す

しかし、このプロジェクトはいわゆる〝ごみ〟だけをテーマにしているわけではない。音楽業界で浮き彫りになりつつある、楽器生産が招くコストの問題にも光を当てている。

楽器の多くは希少な素材でできていて、クラリネットの原材料であるアフリカン・ブラックウッド（グラナディラ）と、ギターに使われるローズウッドの減少が特に懸念されている。また、チェロやバイオリンの弓材となるブラジルウッド（ペルナンブコ）も同様の危機に瀕している。

弓の反りを長く保つ材質のブラジルウッドは、何百年も昔から弓職人に重宝されてきた。ところがこの木は、森林の違法伐採で10年以内に絶滅の恐れがあるといわれている。世界唯一の生育地であるブラジル大西洋岸森林の面積は元の6％にまで縮小し、2018年には違法伐採による木材から生まれたバイオリンの弓が闇市場で2万本以上も押収された。

『リサイクリング・コンチェルト』には「演奏のために新たに必要なものを購入しない」というコンセプトのもと、聴覚と視覚を通じて環境問題を捉え直そうとするマイアホーファーの思いが込められている。YouTubeではごみを再利用した楽器の作り方の映像が公開されており（※）、ドイツの学校ではオリジナルの楽器を制作する出張ワークショップも行われるなど取り組みの輪が広がっている。

（Claire Jackson, The Big Issue UK／編集部）

※ https://www.youtube.com/channel/UCbhOS6ED977PnCa4FGJcfjA

英国「オールドバラ音楽祭」にて、今年6月に披露された演奏の模様
Photo: Aldeburgh Festival

コーヒーメーカー用のカプセルや瓶のフタも楽器になる
Photo: Lucas Campara

ペットボトルの音は内部の空気圧で調律
Photo: Lucas Campara